

大学の進学実績を重視している高等学校のキャリア教育の在り方 —所属校のキャリア教育の充実に向けて—

総合支援課 高校 I 班
実務研修員 吉田直樹

1 はじめに

高等学校卒業生の大学進学率は 1990 年以降急速に上昇し、高校生の半数以上が大学に進学するようになってきている。一方で、目的が曖昧なまま大学に入学する生徒の増加や、学びの意欲の低さといった課題も指摘されており、結果として大学の中途退学者の増加や、大学卒業後に専門学校に入学する者の割合の上昇を引き起こしている。さらに、新規大学卒業生の 20% 近くが正規の職員として就職できない（「学校基本調査」2013 年）だけでなく、仮に仕事に就いても転機や変化がいつ起こるか分からない社会の状況を考えると、大学に進学することが必ずしも安定した将来につながるわけではないことが分かる。

また、学校教育法では、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」と示されており、高等学校は個性を確立しながら、社会で生きていくために必要となる力を身に付けるとともに、社会的自立に向けた準備の場の一つであることも忘れてはならない。

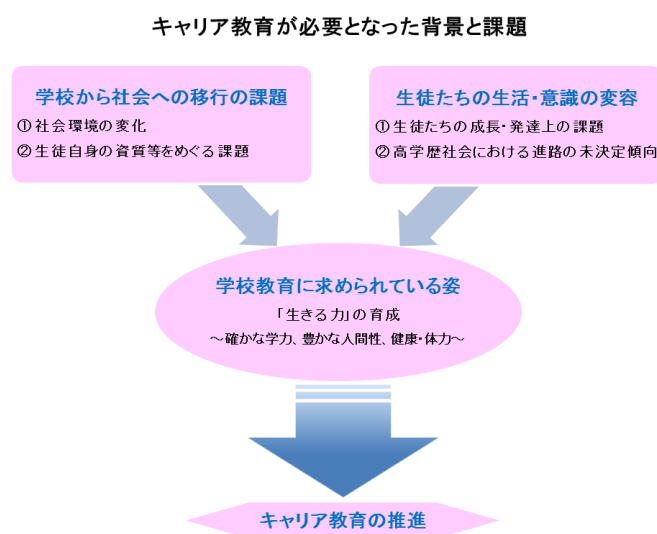
つまり、変化に富んだ社会においても、たくましく生きていけるような生徒を育てる必要があり、そのために高等学校に求められている役割は大きく、キャリア教育を一つの柱にしながら教育活動全体を考えていかななくてはならない。大学の進学実績を重視している高等学校（以下、「進学校」）においても例外ではなく、正しい進路を選ぶ力はもとより、主体的に学ぶ姿勢や、勤労観・職業観などを育成するキャリア教育を充実させることが不可欠である。

そこで、大学進学を希望する高校生の現状や、大学生を取り巻く社会環境を明らかにすると同時に、進学校で行われているキャリア教育について調査し、大学進学に向けた指導に力を入れている所属校でどのように生かせるかを報告する。

2 キャリア教育が求められる背景

社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的な変化や雇用の多様化・流動化は、就職・進学を問わず生徒たちの進路をめぐる環境に大きな変化をもたらしている。また、自分で意志決定ができない、自己肯定感を持っていない、人間関係をうまく築くことができないなど、生徒たちの精神的・社会的側面における発達課題も見られる。

このような中で、希望を持ち、未来を切り拓いて生きていくためには、変化に対応していく力と態度を育てるこ



「高等学校キャリア教育の手引き」より

とが必要である。また、様々なことに関心を持ち、仲間と協力して学び、未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで、生涯にわたって学び続ける姿勢を身に付けることも求められている。

さらに、高等学校では学校から社会・職業への移行の準備として、専門性の基礎を身に付けさせなくてはならない。そのために、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度を育成し、さらには、これらの育成を通じた勤労観・職業観等の価値観の形成・確立が必要であり、社会・職業の現実を理解することや、自分が将来どのように社会に参画していくかを考えさせることが不可欠である。

高等学校段階でのキャリア発達課題

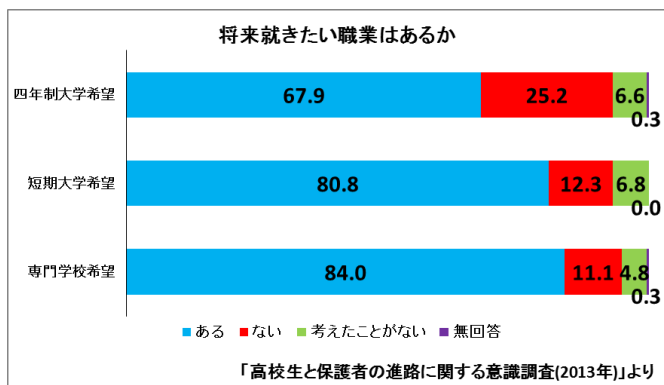
- 自己理解の深化と自己受容
- 選択基準としての勤労観・職業観の確立
- 将来設計の立案と社会的移行の準備
- 進路の現実吟味と試行的参加

「高等学校キャリア教育の手引き」より

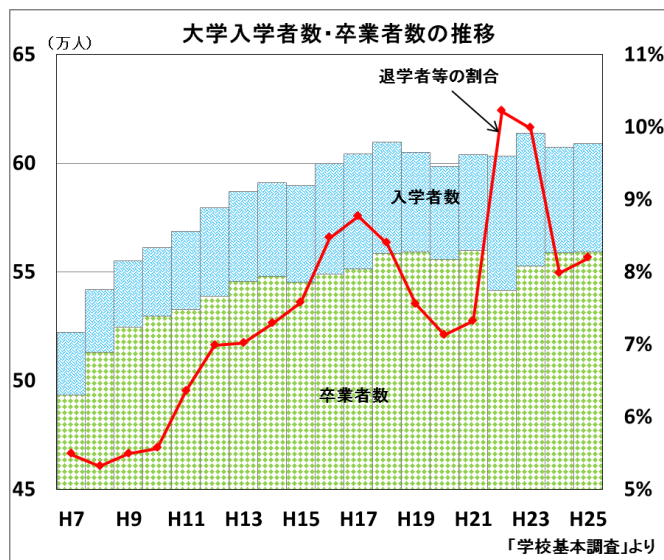
2011年に中央教育審議会がとりまとめた「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」において、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。つまり、生徒が自らの力で生き方を選択していくことができるように、必要な能力や態度を育てることがキャリア教育の目的であり、将来生徒たちが直面するであろう様々な課題に、柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立できるように指導しなくてはならない。

3 大学進学時の現状

進学校では、多くの生徒が大学等の高等教育機関を経て社会に出て行くことになるが、社会における自己の姿を思い描けず、進学する理由についても「すぐに社会に出るのが不安」、「自由な時間を得たい」、「周囲の人が進学するから」等、進路意識や目的意識が希薄なまま進学している生徒が少なからずいるのではないかと考える。その結果、就きたい仕事を見つけられないまま進学して、将来の生き方・働き方についての選択や決定を先送りすることになるが、短期大学や専門学校希望者に比べて、四年制大学希望者にその様子が強く表れていることが調査結果から見てとれる。



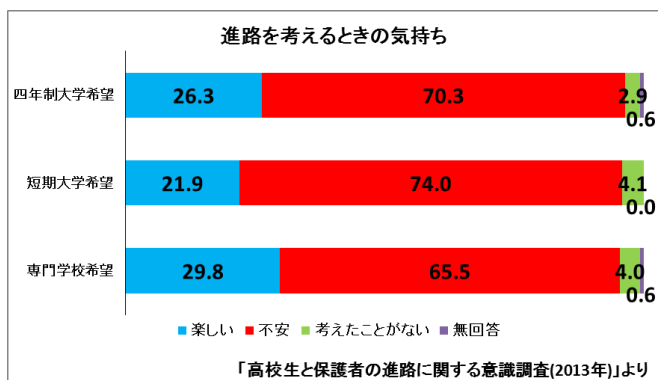
また、大学進学率は上昇しているものの、中途退学者も増加傾向にある。毎日新聞(2014年9月25日付け朝刊)では、最多の中退理由を「経済的理由」としているが、背景には学業不振などの複合的な要因が潜んでおり、「〇〇大学ならどこでも構わない」と学部を選ばずに入学し、入学後も興味を持てず



に授業から遠ざかっていることも原因の一つではないかと分析している。中日新聞(2014年8月16日付け朝刊)では、大学に通いながら再受験している人が相当数おり、現役で大学に入学したものの自らの進路希望とのミスマッチを起こしていると指摘している。

さらに、国立教育政策研究所「大学生の学習状況に関する調査」によると、大学生の約3割が卒業後にやりたいことが明確ではないと答えており、大学に入学したものの、受験時に目標を持たず、大学でもやりたいことを見つけることができず、どうしたらいいか分からなくなり退学する人が多数いると考えられる。

国立教育政策研究所「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」の調査結果によると、進学を希望する高校生の約7割が進路を考える時に不安を感じており、多くの高校生や卒業生が「自分の個性や適性を考えること」について指導して欲しかったと答えている。これらは、高校卒業後のことを考える際に、じっくりと現在の自分自身を見つめ直したいという希望があることの現れであり、自己を深く理解した上で、より自分らしい生き方や職業選びを考えさせなくてはならないことが分かる。

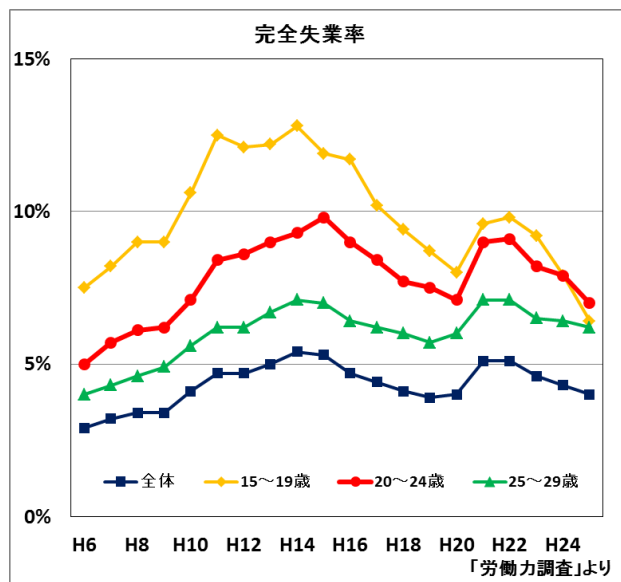
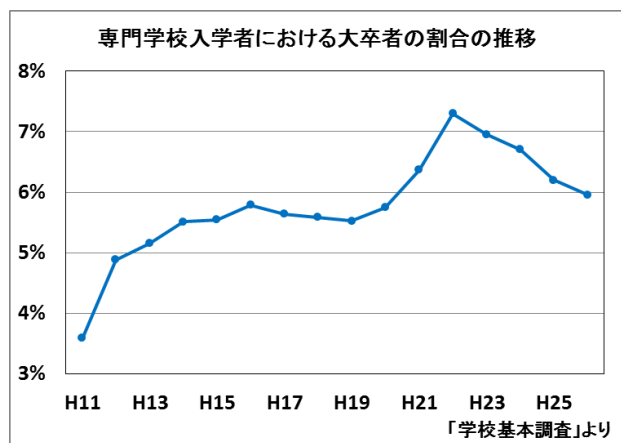


4 大学卒業後の現状

文部科学省「学校基本調査」によると、大学卒業と同時に専門学校へ進学する人は1万5千人以上おり、専門学校入学者全体に占める大学卒業者の割合は、平成11年度に3.6%であったが、その後は5%台になり、リーマン・ショック後はさらに増加している。専門学校に入学した理由について、約8割の人が「資格取得や検定合格のため」もしくは「勉強したいことが大学ではできなかったから」と答えており、大学進学をしたが、社会へ出てからの自分の姿と大学で学んでいることを結び付けることができず、大学卒業後に専門学校へ入学する人が少なからずいることを表している。

また、総務省統計局「労働力調査」によると、昨年度の全年齢の失業率が4.0%であるのに対して、20歳から24歳までの年齢層の失業率は7.0%となっている。さらに、大学卒業者をみても、安定的な雇用に就けない人が2割程度いる現状を考えると、若年層の雇用情勢の厳しさがうかがえる。

このように、大学卒業後に「手に職」を求めて専門学校で学び直す者や、景気の動



向による新卒採用数の減少により、大学卒業後に安定した職に就けない者が増えており、「大学へ行けばより良い生活が待っている」とは簡単には言えない状況が生まれている。国立教育政策研究所「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」の中にも次のような記述がある。

高等学校段階においてより重要なのは、「卒業直後の進路の決定」のみに焦点が絞られるのではなく、「卒業後の生活を展望し、働くこと・学ぶことの意義とその現実の理解を深めること」が目指され、十分に指導されることである。(中略) 離職や失業を経験する者は今日例外的な存在ではなく、そのような若者たちは進路の再選択や将来計画の再設定を余儀なくされる。

つまり、高等学校において、高等教育機関への進学希望者に対しても「大学等の向こう側にある社会」を意識させ、将来について考えさせる必要があり、キャリア教育を通じて自らを生きながら社会に参画し、自己の立場に応じた様々な役割を果たし、自立できる力を育成することが求められている。

5 進学校で行われているキャリア教育

全国のキャリア教育の先進校において、どのような実践が行われているかについて調査した結果、いくつかの参考になる事例を見出すことができた。以下にその事例を挙げる。

(1) 秋田県立能代高校の実践より

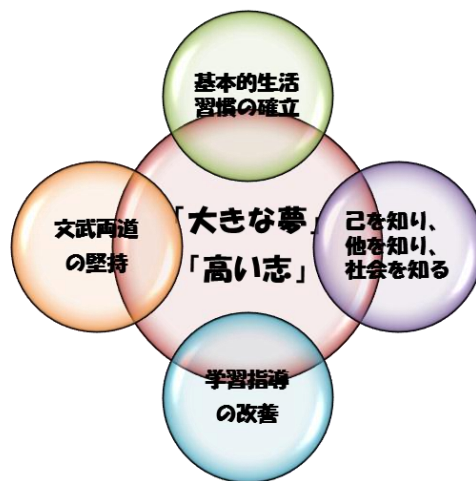
明確な目的意識をもって進学を志す生徒の減少や、自発的な学習習慣が身に付いていない生徒が増加しており、現在行っている指導では、これ以上飛躍的に生徒の能力を伸ばすことはできないと学校は感じていた。

また、「何をやりたいのか」と夢を生徒たちに問う機会は多くあるが、「その夢を何に活かしたいのか」、「それをする中で人や社会にどう働きかけるのか」という志の視点は薄くなっている。今後は、日本に限らず世界においてもますます不安定

な社会になることが予想されるが、志を持った生徒たちは、困難な場面に遭遇しても、志を軸にしながら自分の進路を見直して前に進む力を持ち続けられると考えている。

そのために、知識を与えるだけの指導から脱却し、生徒が自らの目標に向かって主体的に学び可能性に挑戦するなど、生徒一人一人の能力や特質を伸ばし、さらに「大きな夢」と「高い志」を持てるように、社会人講話やインターンシップ、学部学科研究等を充実させている。

能代高校の指導の柱



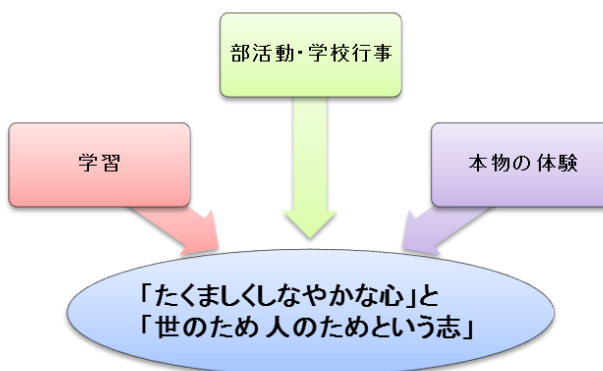
(2) 三重県立津高校の実践より

生徒は、働く大人の姿がイメージできていない状態のまま進路選択を強いられているので、働く大人との出会いから地元を軸足を置いて世界を観ることを大切にしながら、体験・探求の機会を多く設け、職業観や人生観を培っている。

平成 25 年度は、「20 年後の理想的な三重県を創ろう」をテーマに、大学教授からの問題提起を受けたり、町役場の職員による講演を聞いたりして、地域を良くするための方法を検討し、最終的には生徒の提言書を県知事に直接手渡してプレゼンテーションを行った。生徒にとって、志を持つ大人と関わることは大きな刺激になり、高い目標に挑戦しようする意欲が高まってきた。

また、点数として見える学力を向上させるためにも、関心や意欲、思考力などの見えにくい学力を育てるようにしており、入れる大学に入学させるのではなく、高い目標を持たせて力を伸ばすことを重視している。

津高校のキャリア教育の概要



(3) 宮城県立仙台向山^{むかいやま}高校の実践より

明確な進路希望がない生徒は、追い詰められると踏ん張りが利かず、すぐに志望を変えてしまう。そのため、大学で学ぶ目的を明確にし、どうしてもこの大学に入りたいという強い動機を持たせ、勉強がつらくても頑張り抜く姿勢を育みたいと考えている。

1 年次では、「社会とつながる」をテーマに、まずは社会の課題への興味・関心を養い、それを解決する手段として働くことの意義を考えさせる。その上で、自分が調べた社会問題について、社会人がどのように解決策を模索しているかを聞きとることを重視して事業所訪問を行う。また、「自分も社会に貢献できる」という自己肯定感や、進路に対する前向きな姿勢を育むために、社会で活躍する 50～60 人を講師に招き、生徒と語り合う場を設けている。

仙台向山高校のキャリア教育のテーマ



2 年次では、「学問とつながる」をテーマとし、大学のオープンキャンパスへ参加して志望理由書を作成する。オープンキャンパス前には、志望する学問分野ごとのグループで討論し、学問から広がる進路の多様さを実感させる。生徒は、志望のきっかけ、学べる内容や社会的な意義などを事前にワークシートで確認しながら、3 ヶ月かけて志望理由書を完成する。「なぜその学問を学びたいのか」という問題意識を強く持たせることを重視させながら、多様な選択肢を示すと同時に、理解が浅い部分につい

ては、生徒に主体的に考えさせ、その考えを引き出すようにしている。

3年次では、「自分とつながる」をテーマとし、第1志望に挙げた学問分野に関する課題研究を行い、学問と社会のつながりを考え、自分の志望をより明確にしていく。課題を調べるうちに、志望と「社会の課題」とのずれを認識する生徒もあり、大学入学後のミスマッチを未然に防ぐ効果が出ている。

他にもいくつかの進学校のキャリア教育の先進的取組の内容について調査したが、どの教育活動も社会とのつながりを意識したものとなっている。さらに、それらを系的に行うことにより効果的な実践となっていた。ともすれば、生徒が受身になりがちな講演会については、自分の考えを持たせ、それを表現させるなど、聴くだけでは終わらないような工夫がなされていたり、言葉の説明だけでは伝わりきらないことを直接感じることができるような、体験的な要素を含んだ取組が行われたりしていた。

6 体験的学習の充実

キャリア教育は、自分と社会について広く考える活動である。生徒と教師といった限られた関係だけではなく、様々な大人と人間関係を形成したり、専門的な知識・経験をもつ社会人や職業人から直接学んだりするような体験的な学習の充実が必要であり、大学、地域や企業等の学外との連携はますます重要になっている。

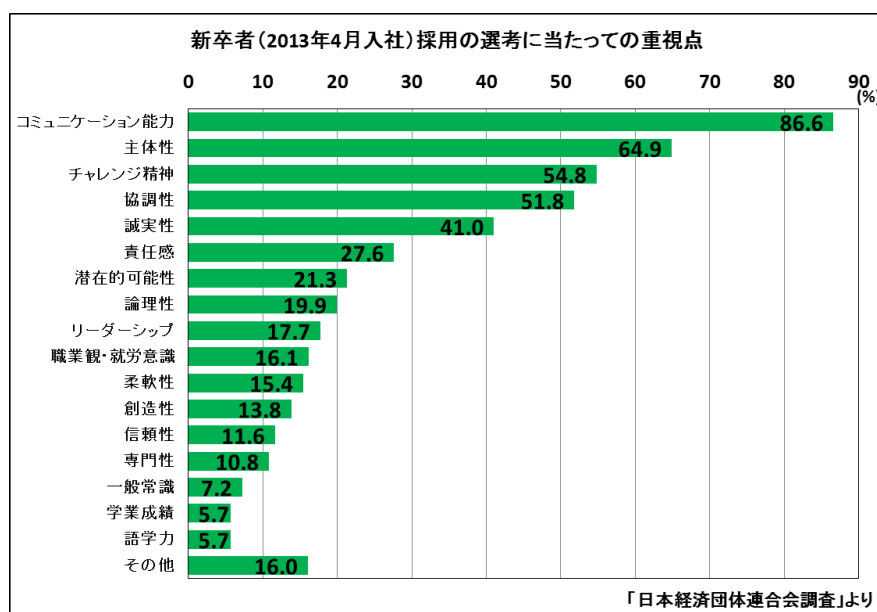
職場体験やインターンシップ等の教育支援活動を実施している企業では、参加者に好ましい効果があると考えており、中でも「勤労観、職業観の育成」、「基本的な社会常識・規範やマナーの修得」、「コミュニケーション能力の向上、協調性の修得」に効果があるとする企業が多い。

日本経済団体連合会が実施した「新卒者(2013年4月入社)採用の選考に関するアンケート集計結果」では、「新卒者採用の選考に当たっての重視点」のうち、最も多く挙げられたのが「コミュニケーション能力」(86.6%)であり、「協調性」を挙げる企業も51.8%に達した。つまり、企業が職場体験等の活動を通し

て高められたと自己評価している能力と、企業が新卒者採用において重視する能力に共通する部分の大きいことが分かる。

体験的な取組について、文部科学省「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書」では、次のように述べられている。

インターンシップ等を実施することは、生徒に自己の将来について考えさせるとともに、社会や職業に対する認識を深め、学ぶことの重要性を考えさせる上で極めて有効である。

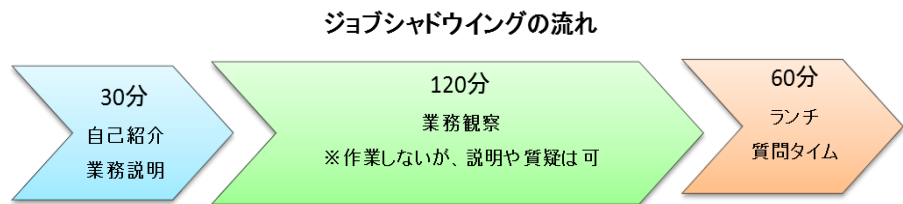


また、文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」では、インターンシップの目的について以下の4つが挙げられている。

- ・働くこと、生きることの尊さを実感させ、勤労観、職業観を醸成する
- ・進路選択への積極性を醸成する
- ・学習意欲を向上させる
- ・「基礎的・汎用的能力」を育成する

このように、インターンシップは、体験的な取組として効果が高いとされているが、国立教育政策研究所「職場体験・インターンシップ実施状況等調査」によると、「授業時数の確保が困難」、「受け入れ先の確保ができない」などの理由により、職場体験のインターンシップを体験した生徒の割合は普通科でわずか18%程度となっており、取組は十分とは言えない状況である。さらに、大学卒業が就職の条件となっているような専門性の高い職場で、高校生の体験先として受け入れられにくいことは、進学校におけるインターンシップが普及しにくい原因の一つともなっている。

そこで、インターンシップと同じような効果があると言われていて、ジョブシャドウイングを取り入れても良いのではないかと考える。ジョブシャドウイングは、働く大人に「影」のように付き従い、仕事の様子を観察することで社会人の働きぶりや考えに間近で触れることができるものである。具体的に何かの仕事を行うというわけではないので、高校生でも専門性の高い職場に受け入れられやすく、半日程度のプログラムなので企業の負担も比較的小さいという特徴もある。

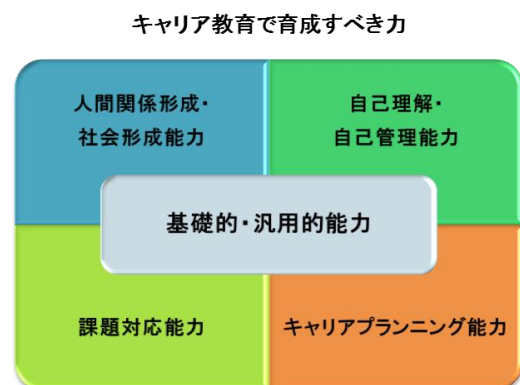


自らの将来を具体的に思い描き、専門的な能力に加え、人間関係を形成する力や仕事の進捗状況を踏まえた自己管理能力など、仕事をするうえで求められる知識やスキルを理解することができるので、体験的な取組として十分な効果が得られるはずである。

7 まとめ

(1) 実務研修を通して学んだこと

進路グループによるキャリア教育の勉強会への参加を手掛かりとし、キャリア教育に関する報告書や書籍を読むことや、講演の聴講を通してキャリア教育の理解を深め、今まで自分が行ってきた教育活動をキャリア教育の視点から幅広く見つめ直すことができた。特に、4つの能力によって構成された「基礎的・汎用的能力」を生徒に育むためには、学校で行われている全ての教育活動に対して私自身の心構えを変えていく必要があり、この気付きは自分にとって大きな転機となったと感じている。また、授業で生徒に思うような力を付けさせることができず、この数年間授業の方法に行き詰まりを感じていたが、「基礎的・汎用的能力」を育むという視点



で授業を捉えることで解決の糸口が見えてきた。

「小・中学校キャリア教育基礎研修」では、他の研修員と協力してキャリア教育の全体計画案を作成する機会があった。生徒の現状と課題をきちんと把握することで、育成したい能力がはっきり見え、全体計画の作成や、さらには各学年や学期での到達目標につながっていくことを実感できた。また、キャリア教育は、新しい活動を取り入れることを意味するのではなく、授業を含めた既存の教育活動の目的を明確にして行うことが必要であり、保護者や地域、企業の力を借りることで、より効果的なキャリア教育が行えることを理解することができた。

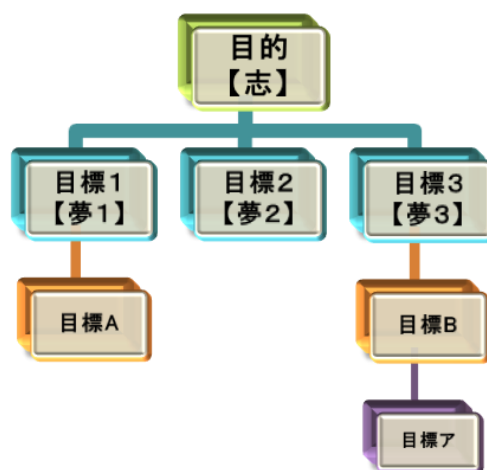
さらに、「高等学校キャリア教育プランニング研修」では、キャリア教育の先進校である御殿場南高校の実践が報告されたが、「地域に貢献する人材の育成」を使命とし、学校での学びの意味に気付き、学びへのモチベーションを喚起できるようにキャリア教育を計画していることが印象に残った。結果として家庭学習時間の増加や模試成績の向上などの変容が見られ、キャリア教育が生徒の学習に対する意識の改善につながっているとのことであった。これら2つの研修から、学校行事が明確な目的を持って運営されるためには、キャリア教育で育成したい力を学校全体で共有することが重要であることを改めて認識した。

(2) 所属校におけるキャリア教育

キャリア教育は、どのような力を育成したいのかを見極めた上で、重点を置く実践を意識的に絞ることが大切である。そして、その実践をより有効なものにするため、系統的に行うべきである。

そこで私は、「志」となる目的と、「夢」となる目標をキーワードにキャリア教育を捉えてみた。目的は、成し遂げようとする事柄であり、自分の人生の行き先を決めるための揺るがないものである。それに対して目標は、目的を達成するためのめあてで、複数のもを設定できることが特徴であり、ある目標に到達できなくても、他の目標から目的の達成を目指すことができるものである。そして、「体験的な取組」と「大学の志望届」を核にして「総合的な学習の時間」や「LHR」でキャリア教育を系統的に行うことで、目的を発見したり、目標実現のために高等学校卒業後の進路を明確にさせたりして、最終的には「主体的に学ぶ姿勢」を育成して学習意欲の向上につなげていく所属校での学習プログラムを考えた。

志と夢のつながり



ア 社会を知る学習～目的や目標の発見のために～

新聞や各自治体の広報を利用して現在の社会の問題や課題を調べて、関心があることについて解決案を考える。それらを掲示したり、グループ内で発表や討論をしたりすることで、他の生徒の考えや意見を共有するとともに、改めて自分の解決案を見つめ直す。そして、クラスまたは学年内で同じような内容の生徒でグループを作り討論することで、解決案をさらに深く考えていく。その後、実際に問題や課題

の解決に取り組んでいる社会人と職業別講座での意見交換を通じて、解決案をより具体的なものにしていきながら、最終的には職場を訪問し、解決していくために実際に行われていることなどを肌で感じて、志となる将来の目的や、夢となる目標の発見につなげる。

★ 社会を知る ★



イ 学問を知る学習～卒業後の進路を明確にするために～

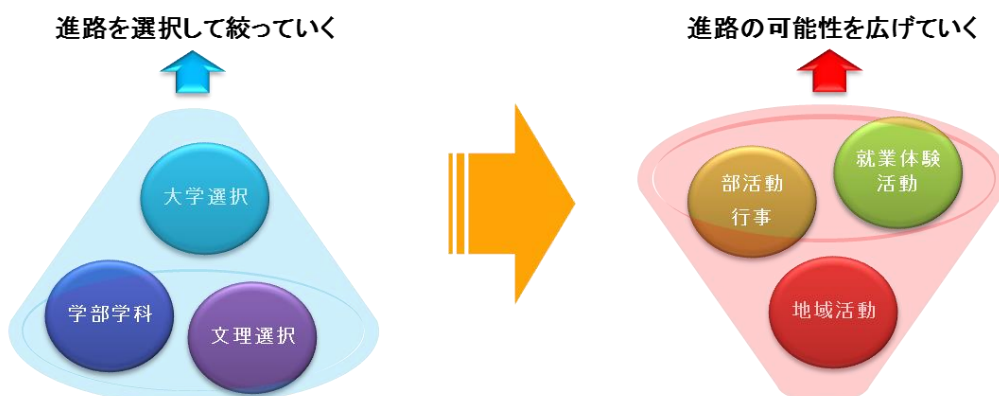
関心のある学問分野について調べ、同じ学部や学科を希望する生徒でグループを作り討論することで、学問の理解を深めると共に、社会の問題や課題とのつながりも考慮し、自分の「志」である目的とのずれがないかを確認する。そして、オープンキャンパスに参加し、大学で学ぶ意味をしっかりと理解した上で、第一志望の大学を決め、志望のきっかけや学べる内容、さらには社会的な意義などを盛り込んだ志望届の作成につなげる。

★ 学問を知る ★



このように、すべての教育活動を刷新するのではなく、現在行われている教育活動を基にしながら、意見発表や討論などを取り入れるなど活動の方法を用いたり意識を変えたりすることで、十分な効果が期待できるものとする。

現在の社会で、仕事の内容や働き方が大きく変わることは決して珍しいことではなく、しっかりとした人生を歩き続けるためには、変化に柔軟に対応する力が求められる。



る。つまり、様々な選択を行いながら進路を絞ってきた今までのスタイルではなく、増える経験や身に付けた知識・スキルを生かしながら選択できる進路を広げ、状況に応じて目標や目標到達手段を修正していくことが必要となっている。そのために、自分の中に「志」となる譲れない信念やこだわり、「夢」となる目標といった、生きる上での軸がこれまで以上に必要であり、キャリア教育を通じて育んでいかなくてはならないと考える。

また、高等学校での学びが自分の人生をどう切り拓くのか、生徒がイメージするのは簡単ではなく、学びに対する意欲や態度に大きな影響を与えている。学校で扱う学習内容はそれぞれ固有の特質があり、どんな仕事でも求められる論理的な思考力や自己管理能力などの育成につながったりする学習内容がある一方で、特定の職業に必要とされたりする学習内容もある。現代社会を生きる人として知っておかなくてはならない知識やスキル、余暇を豊かに生きていくために基礎となるような内容の学習もある。このように、結び付き方は様々ではあるが、高等学校での学びは生徒の職業や人生に結び付くものであり、テストや受験のためだけではなく、真の自立のために生涯を通じて学び続ける姿勢が必要となる。このような姿勢を育むためには、生徒が学ぶ意味を理解しなければならないが、キャリア教育を通じて社会と関わる中で、生徒が自ら見いだすことができるのではないかと考えている。

進学校では、偏差値や大学合格者数といった、数値化されて成果が目に見えるものに注目されがちではあるが、心や態度といった目に見えにくいものも大切にすることがあり、社会の形成者として必要な資質や、社会の発展に寄与する態度を高等学校で育てていかなくてはならない。生徒が自分の役割や価値を見いだしながら、たくましく生きていけるように、また、高等学校での学びの成果を生徒自らが人生の中で発揮していけるように、教育活動全般をキャリア教育の視点で捉え直していきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省
「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書」2006年
「高等学校キャリア教育の手引き」2011年
「学校基本調査」2013年
- ・文部科学省国立教育政策研究所
「キャリア教育は生徒に何ができるのだろうか？」2010年
「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」2011年
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年
「大学生の学習状況に関する調査について」2014年
- ・中央教育審議会
「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」2011年
- ・全国高等学校PTA連合会・リクルートマーケティングパートナーズ
「高校生と保護者の進路に関する意識調査」2013年
- ・下村英雄「キャリア教育の心理学」（東海教育出版社）2009年
- ・鈴木達哉「進学校のキャリア教育」（学事出版）2011年
- ・児美川孝一郎「キャリア教育のウソ」（ちくまプリマー新書）2013年